

トーマス・マンの「すげかえられた首」の一問題

樋口, 忠治

<https://doi.org/10.15017/2332826>

出版情報 : 文学研究. 60, pp.143-150, 1961-03-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



トーマス・マンの「すげかえられた首」の問題

樋 口 忠 治

1

「すげかえられた首・インド伝説」(一九四〇年)は吠陀に通じた婆羅門の血筋をひいた「高貴で総明な頭部」を持つシュリーダマンと、鍛冶屋で牛飼いの腕たくましい「自然の子」ナンダ及び「腰の美しい」女シーターという三人の男女の物語である。さてナンダのもつさまざまな属性は「精神的な」シュリーダマンのそれと極めて極めて対照的である。シーターはシュリーダマンの妻となるのであるが、夫の細い腕の中で自己分裂に悩みながらナンダの身体に憧れている。二人の男も幸福ではない。一方は結婚したのに愛されず、他方は愛されているのに結婚してないからである。若しシーターがシュリーダマンではなくて、ナンダに嫁いでいたとしたらこれ以上のことはなかったというものである。シーターはナンダの逞ましい腕に抱かれて華奢なシュリーダマンの頭のことを想っていいばいいのだから。

処がここに思いがけない事態が生じて事は一変するのである。運命の気紛れと神々の気紛れによって——それはおどましくも慈悲深くというか慈悲深くもおどましい気紛れなのだが——シーター

1は二人の男のからだだが首を刎ねられ、互いに並んで横たわっている有様を目撃しなければならぬ羽目になるのであるが、超自然的な力——これはトーマス・マンの場合「物語の精神」⁽¹⁾と呼んでもいいであろう——が彼女をして二対の頭と胸をもう一度つなぎ合わせ、息を吹き返させることになるのである。驚愕のために気を失い、半ば無意識裡に——そしてこの所が大切なのだが——半ば意識的にシーターは二人の男の頭と胸をつなぎ合わせる。処がそれはシュリーダマンの頭をナンダの胸に、ナンダの頭をシュリーダマンの胸にであつたのだ。尤もシーターがシュリーダマンの頭とナンダの胸を今やあわせ持った方の男を好ましく思ったのはいうまでもない。彼女はそれを頭に抱いてシュリーダマンと呼び、この男をこそ自分の夫にしたいと思う。だが果してこの男こそ彼女の夫なのであろうか。人格を決定するのはからだなのか頭なのか。名前を持つているのは人間のからだなのか頭なのか。神聖な結婚の契を結ぶのはからだなのか頭なのか。新らたに出来た二人の男のうち何れがシュリーダマンであり、シーターの夫であるのか。こういった疑問が起つて来て、果ては口論となり、遂に森に住むある行者のもとに出掛けて行つて裁きを乞ふことになる。と

ところがこの行者の裁きというのが甚だ釈然としない。最初彼はからだこそ決定的なファクターであるといい、次に言を讎えて頭こそ決定的であるという。一体判定は何れなのであろう。語り手は「後にいった事」が裁きだと行者にいわせている。それにしてもこの裁きには曖昧な印象が残されている。だから語り手はその後で「――聖者がその判決に与えた見事にも優雅な根拠については触れずにおくとして」⁽²⁾。といつてこの裁きにある含みのある事を匂わせているのである。この一文の目的はこの含みの意味を明らかにする点にある。結局「シュリーダマン」は「ナンダ」の胸ともどもシーターを伴つてこの場を去り、「ナンダ」は「シュリーダマン」の胸を従えて森に入つて行くことになる。

物語はここで終つてもいいのである。総明な男の高貴な頭と逞ましい男の健康美にあふれるからだは一つになった。そしてシーターにしてみれば、かねて欲しい欲しいと思つていた二つのものを二つながら手に入れたのである。重ねていうが、これでこの物語は終つてもいいのである。処が実際には物語は終らない。これで終るのなら、それは単なる「インド伝説」に過ぎないであろう。

さてトーマス・マンはここでシーターが再び、一体自分は二人の男のうちどちらの妻なのか、どちらの妻になりたいのかが分らなくなるように二人の男を変えてしまふのである。つまり現在のシュリーダマンにおいてからだと頭が互いに影響し合い、逞しいからだに乗った頭は精神的なものを失つてゆき、華奢な頭を支えるからだは粗野なところを失つてゆくことになる。これは他の一方、つまりナンダとても同様で、かつてのシュリーダマンのから

だは粗野なナンダの頭の頭的作用を受けて次第に逞ましくなつてゆき、その頭は華奢なシュリーダマンのからだの作用によって弱々しく瞑想的になつて来る。即ち両者共からだと頭とが互いに作用し合い、中和し合つて調和的な存在を形成するのである。しかしこの物語は未解決のまま終ることになる。何故なら二人の男は再び（今度は前回のように我れと我が首を刎ねるのではなく）互いに殺し合つて死ぬからである。しかしこの「相互自殺」とても半ば我れと我が心臓を突くのに他ならないことは、二人の頭と胸の組み合わせが今と昔では違つている事からも推察出来る。唯問題は森の行者カーマダマナの甚だ釈然としない意味あり気な裁きの意味である。

2

首のすげかえというモチーフが精神的なるものと自然的なるものという対立概念の合一の試みの手段として用いられていることは疑いを容れない。しかしこの試みが成功したか否か、つまりトーマス・マンがこの作品において合一を肯定しているのか否定しているのかという点では必ずしも諸説が一致していない。例えばヴォルフは「夢にまで見られた合一は不可能であることが明らかに⁽³⁾」といっている。何故なら首のすげかえという実験を通してようやく手に入れたシュリーダマンの頭とナンダのからだ、即ち精神と自然の合一もやがては相互作用によつて夫れぞれの特性を失ひ、結局は一切が再び元の木阿弥となつたからだというのがその根拠である。トーマス・マンはこの伝説において二重視福、つまり精神と自然の合一を断念したのだというわけである。

処がその説とは全く正反對にアイヒナーは「合一への憧憬は叶えられる⁽⁴⁾」のだといっている。何故ならシーターの子、サマーディは長ずるに及んで賢明であったと同時に美しい姿の持主であったからである。しかもサマーディという名は結びつく、調和するという意なのである。両者の論拠を別にすれば、合一という点に関してヴォルフとアイヒナーの立場が全く相容れないことは明らかである。

トーマス・マン自身この作品を「形而上学的冗談」であるといっている。作品の内部には撞著する言葉が到る所に現われる。例えば語り手は「しかしこの場合も疑いがたい一事があったとすれば、それは万人の眼にもあざやかに人間の個性というもので一番ものをいうのはやはり頭であって、頭こそ人間にとってまさに決定的なものだということである⁽⁵⁾。」と述べている。この言葉からすれば精神の優位ということが肯定されているのは明らかであって、裏を返せば合一は断念されていることになる。逆にまた語り手はシュリーダマンをして「苦と楽とをはっきり区別して考え、一方を否定し他方を肯定するのは間違ひなのだ……いいとかわるいとかいいたいのなら、両方をひっくり回してでなければいけない⁽⁶⁾。」ともいわせている。この立場よりするならば勿論精神の優位は否定され、二重祝福こそ肯定されていると考えられねばならない。結局この問題は作品の内部のみに頼っている解決が難しい。むしろ外的な要因を援用することによってこの問題は明らかにになるのではあるまいか。そこで私は「すげかえられた首」を「ヴェニスの死」(一九一一年)と対照しつつ、両者における対立概念の相違、つまり両者の間に起った根本的な概念修正を強

調することによって「すげかえられた首」におけるトーマス・マンの意図を汲みとろうと思う。

3

「ヴェニスの死」では芸術家は、美という眼に見えるものを通じて初めて精神に到達できるのであった。その主人公アッシエンバッハの夢うつつの中に現われたソクラテスは「美は感覚的な者のゆく道であるし、芸術家が精神へ行く道なのだ⁽⁹⁾。」といっている。ここでは「美なるもの」は「精神的なるもの」に到達するための手段にすぎず、道程にすぎない。その道程がヴェニスであり美少年タッヂオなのである。その報酬がアッシエンバッハの病死なのである。

それに対して「すげかえられた首」のシュリーダマンは、すべてのものには二つの面がある、美という一つの現象を追求すると同時に、その美的なるものの持っている別な面、即ちそこに存在しているもの自体としての面をも捉えなければならぬといっている。何故なら眼に「映るものはまだ現実とはいえない。そういうところに立ち止っていないで、われわれはいわばそのうしろ側に廻ってみて、すべてのものの現象が要求してしかるべき認識を獲得すべきなのだ。なぜなら、現実とは現象以上のものだからだ。そこで問題は何かというと、現象の実体、現象の魂を姿のうしろに探るということなのだ⁽¹⁰⁾。」これと全く同じ意味のことをすでにトーマス・マンは「ゲーチとトルストイ」(一九二二年)の中で次のように述べている。「人間の姿は上わべから見ただけではつかめ

ません。美しい纏った全体をなして、生々とした波間に見え動いているものを、本当に観て模倣しようと思うならば、その内部をあばき、各部分を分かち、その結合に着目し、相違を識り、作用反作用を学び、背後に隠れているもの、休んでいるもの、現象の基礎となっているものを頭に入れなければなりません。」これはトーマス・マンがゲーテの言葉を引用したものであるが、それが先のシュリーダマンの言葉と全く同一のことをいっているのであることは明らかであろう。換言するならば、現実には現象としての面と存在としての面という二面があるということになる。

現実を二面性において観ることをトーマス・マンは更に次のように説明している。「あの娘はすべてであつて、ひとつのものであるばかりではない。生と死、狂気と叡智、魔術師と解放者なのだ。いいかね。あの娘が人心をまどわし、魅了するということはかりを君は知っていて、と同時にあの娘が妄執の闇を越えて真理の認識へと人を導いて行くということを君は知らない。」⁽¹²⁾「ここでは「同時に」という言葉が非常に重要な意味を持っている。美は人をまどわし魅了する、と同時に、真理の認識へと人を導くのである。シュリーダマンはこういつている。「あの乙女の二重性のうちにこそ己たちは偉大な女神を認識しなければならぬ。」しかし事物の両面を同時に見るということは難しい。少くともシーターには出来ない業であつたことは確かである。

首のすげかえというモチーフはここでは精神と自然、精神的ものと美的なものという一種の対立概念を合わせて一つにしてみたらどうであろうという、性急な試みに利用されている。つまり

この試みは一見完全な状況に人間を置いてみた場合、人間の心理はどう反応を示すかという実験なのである。結局この実験によって試みは失敗に終ることが明らかになる。何故なら「人間は自己の欲望の対象に取り憑かれているのみならず、欲望するということ、そのことにも取り憑かれている」⁽¹³⁾からである。トーマス・マンの心理学によれば、人間の欲望は無限に止むことのない必然的性格をもっている。こういう理由からして、ようやくの思いでシュリーダマンの二度目の妻となつたシーターは今度もまた満足を得られない。満足感よりも欲望自体の方が強かつたし、対象そのものより対象を手に入れたと思う気持の方が強烈だつたからである。シーターのこの絶えざる不満足と欲求とはいわばブランコ状況⁽¹⁴⁾といつてもいい。これでシーターとシュリーダマンの間がうまく行こう筈もなく、彼等はただもういらしてどうしようもなくなつてしまふ。

シーターのああでもない、こうでもないと迷う姿は人間の魂の在り方にも比せられよう。そういう魂には最終的に甲を選び取つたり、乙を断念したりすることが不可能なのである。それまたトーマス・マンの文学の魂でもある。かつてそれはブロンドのインゲと文学精神の間に、あるいはナフタとゼテンブリーニの論争の中に形こそ違え似かよつた例を見せている。この緊張関係はトーマス・マンの全ての作品を貫いているといつても過言ではない。ただ「腰の美しい」シーターはこの緊張関係に耐えてゆくには余りにもか弱すぎたのである。

結局のところ、シュリーダマンの頭とナンダのからだ、即ち精神の象徴としてのシュリーダマンの頭と、自然の象徴としてのナ

ンダの肉体を合わせ持った一個の人間、そういう夫に果してシーターが満足するかどうか、これは恐らくは最初から空しい試みなのであった。なぜならそもそものナンダとシュリーダマンという二人の人物は既に一種の強化であり極端化であったのであって、首のすげかえによって出来た一個の人物、即ちシュリーダマンの頭とナンダのからだを兼ね具えた夫とは特殊な諸事情によってその属性を強化され極端化された場合の一例にすぎなかったからである。つまり首のすげかえという試みは人間のもつ二種の属性をシーターをして意識させるための手段にすぎなかったのである。

4

この語り手は「精神はただ精神的なもののばかりを愛し、美はまた美でただ美しいもののばかりを愛するようにこの世界は出来上っていない⁽¹⁶⁾」といっている。しかし語り手はまた「精神と美の結合は通例天上のはかない夢」であって、いわば「及第することのない試験」なのだともいっている。だからこの物語のように性急にふたつのものを合わせて一つにしようとすれば失敗せざるを得ないのである。では人間にはどのような方法が抜け道として残されているというのであろうか。結局われわれとしてはその点が問題なのである。

トーマス・マンは、「ゲーテの『親和力』について」という一文の中で次のように述べている⁽¹⁶⁾。

「われわれは『同時に』という。『順に』ではないのだ。なぜなら問題は精神化と肉体化の混合であり、素朴なものと感傷的なものの相互の滲透なのであるから。」これを今精神と美に関して

いうならば、美なるものを通して精神へでもなければ、精神を通して美へでもない。精神と美とは入り混り一体となって同時的なものとして考えられている。芸術家は美なるものを経て初めて精神的なものに到達するとされていた「ヴェニス⁽¹⁷⁾の死」との間には実に明瞭な距離の開きがある。

トーマス・マンはこの作品のなかで精神と肉体を実験的につなぎ合わせてみる。その結果いづれがいづれともつかぬ二人の男が出来上る。読者の目をくまますこのやり方、ここに「すげかえられた首」の秘密がある。つまり人間は勿論精神ばかりから成り立つものでもなければ肉体的なもののばかりから成り立つものでもない。だからといって機械的にただ精神と肉体を繋ぎ合わせればそれで十分かというとそうではないのである。相対立する対象の合一は止揚されることによって初めてより高い段階において、すなわち対立関係の彼岸において精神と自然とを夫れぞれ別々なものとして認めるのである。そういう止揚された段階にあっては相対立する概念がすでに対立であることを止め、互いに相補う働きをするのである。この物語の終りに近いところで語り手は「結局彼女(シーター)は必ずふたり(シュリーダマンとナンダ)と一緒に相手にしていた」といっている。ふたつのものを同時に相手にするというこの態度、精神だけを相手にしていた筈なのに、実は同時に自然や肉体をも相手にしていたのだという認識、それがトーマス・マンをしてかかる幻想的な作品を書かせたのである。首のすげかえという実験はそういった事情を背景に持っている。

ブルーメは「トーマス・マンとゲーテ」の中で、トーマス・マンの二元的且つ同時的な現実把握の仕方について次のように述べて

⑪。「ゲーテが好んで用いた ernst-heiter とか gesetzmäßig-frei とか offenes Geheimnis とかいうような表現はいみじくもある事物の両極端を同時に見渡し、対象の全体性を正しく評価しようとする努力を修辭学的に表現したものに他ならな
いといわれているが、さてトーマス・マンの用いた gestirnt-verwegen とか diskrete Kühnheit とか köstliche Offenlichkeit とか或は öffentliche Einsamkeit とか ein-same Offenlichkeit などといった語結合もやはりそれと同じ構造を示すものである。」このような言葉の使い方の背後には、現実とは全体として捉えられねば無意味だとする立場がある。そして首のすげかえというモチーフはその幻覚的效果によって、同時に両者をというこの要求を満たし得る唯一の方法でもあったわけである。現実の二元的性格だけだったなら、それは「ヴェニスの死」にも、それ以前の諸作品、とりわけ「トニオ・クレーゲル」にもはつきりと表われている。しかし現実の二元的性格に同時性を与えようとする試みは「すげかえられた首、インド伝説」においてトーマス・マンが初めて真向から取り組んだものである。「同時に」という言葉がこの作品において程重要な意味を持っている場合は少ない。ここにブルームの指摘したトーマス・マンにおける特殊な用語法、結合語の意味がある。

5

「ヴェニスの死」におけるアッシエンバッハの死はいわばエクスターゼの状況に対する終止符である。主人公には最早冷静な理性などはない。その幻想の中でソクラテスがパイドロスに言うよ

うに、精神的なものにゆくためには人は感覚を通らねばならないのだが、感覚的なものを通じてゆく者は破滅しないではないのである。だからアッシエンバッハの死は美なるものを通じて精神へという一方向的図式としての道程における悲劇的な死なのである。この道程には前以って逃げ道が用意されている。アッシエンバッハはコレラ流行の報知を知った時、直ちにヴェニスを去って行く事もできたのである。しかし彼は敢えて悪疫の都に留った。逃げ道は用意されているにも拘わらず、憑かれた者の如く死神の手に通じる道をひたすら歩んで行くという点にこの作品の悲劇性がある。

処がトーマス・マンはこの悲劇的性格を克服しようと努力していた。「ワイマルのロッテ」の中で彼はゲーテの口を借りてこういつている。「わたしのやっていることはすべて、和解であり、調停ではないか、そして、わたしの念とするところは、一方をも他方をもひとしく肯定し承認して、雙方を实らせること、均衡、和合ということではないか……ひそかに自分自身に向けた戯詩としての最高の誘惑的な模範、一方が他方を売るはがらかな裏切りとしての、皮肉としての世界支配、——これで悲劇は克服される」⑫。「ゲーテとトルストイ」が発表された一九二二年を転機とする過程、つまり精神と自然の和解を文学において現実化し具体化するのをトーマス・マンに許したのが伝説スタイルであるとするとするならば「インド伝説」はヨーゼフ小説群やゲーテ小説などと共にパロディとして悲劇の克服をめざす試みであったということが出来る。だから「すげかえられた首」はいわば悲劇の克服の実験として見ることも出来るわけである。

アッシェンバッハの死が悲劇的であつたのに対して「すげかえられた首」の最後の場面つまりシュリーダマンとナンダの相互自殺とシーターの焚死とは極めて冷静で意識的な、納得づくの死なのである。この冷静な死の取り決めはこの物語の結末の悲劇的な性格をうすめ、覆いかくす役割を果している。というのは三人の死そのものは悲劇的な響きをもっているからである。たとえば、シュリーダマンとナンダの「相互自殺」が決つた時、「自分はその死闘の場所を外さず睫毛ひとつ動かさずに立ち会いたい」とシーターがいう場合などがそれで、そこには喜怒哀楽の感情を抜きにした、というよりはむしろそういった感情を越えた冷やかな態度がある。それがとりもなおさず「現象の実体、現象の魂を姿のうしろに探る」あの態度なのである。二人の男の殺し合いに睫毛ひとつ動かさずに立ち会いたいというシーターの言葉の背後に、続者はこの混乱と誘惑の物語の最初からじつと冷静に対象をみつめ続けていたトーマン・マンのまなざしを突然見出して思わずはっとするのである。と同時にこの作品の意図が、精神的なものとか自然的なものかとの優劣を示す処にあるのではなくて、結局は両者を一段と高い次元において「同時に」認めることにこそあるのだということに気付くのである。

6

先に掲げたヴォルフの合一は不可能であつたとする説は皮相な観方ではなかつたらうか。語り手ははっきりとこの話は困難と失敗の一例にすぎないにいつている。その言葉を直ちに合一の不可能の証拠とするのは単純に過ぎる。むしろトーマス・マンは語り

手に失敗の物語を語らせることによって逆の効果を狙つたのだと見るべきである。つまり単純な精神と自然の寄せ集めからは何ものも生じないのであつて、問題は対象にはなく主体、即ち人間の態度の側にあると見る時、三人の自殺行為の後には合一への救いが待っていることが分る。シーターの子サマーディはこの救済を暗示する存在なのである。

カーマダマナの裁きはあの場合至当であつたということが出来る。何故なら彼は二人の男のうち何れにシーターを与えてもよかつたからである。首のすげかえという試みによって二人の男のそれぞれがシュリーダマンでもあり同時にナンダでもあるという奇妙な状況に置かれていた事情を考えるならば、カーマダマナが初めシーターは一方の男のものだとし、次に言を翻えて他の一方のものだとしたのは何等不思議ではない。結局シュリーダマンの頭とナンダの胴を合わせ持った男にシーターが与えられるのは、極端に強化された属性を持つ男をシーターに對置することによって極限の状況をつくり出すための手段に過ぎなかつたのであつて、それは同時に物語の展開に欠くべからざる処置であつた。決定に意味があつたのではなく、裁きの戯れにこそ意味があつたのである。

以上私は「すげかえられた首」におけるカーマダマナの裁きの意味について若干述べてみたが、この問題はトーマス・マンの本質の一環を成すもので、後期におけるイロニイ的性格や伝説スタイルと関連して論じられねばならないと思う。またこの作品の発表された前年に発表された「ワイマルのロッテ」（一九三九年）の第七章には首のすげかえというモチーフをもつゲーテの「パ

リア」の詩想がトーマス・マンによって描かれているのは注目し
 値する。そこで「ゲーテ」はその詩の中で誘惑を讃美し、その恐
 るしい姿を告げ知らせるつもりだといっている。しかしゲーテの
 「パリア」には実際のところそれ程には、というのはマンがゲー
 テ小説で述べている程には誘惑の讃美は描かれていないし、誘惑
 の恐ろしさを描かれてはいない。むしろゲーテのパリアデではパ
 リアという最下位の階級から純粹な人間性を救済することを中心
 になっている。従ってトーマス・マンがゲーテ小説の中で誘惑に
 関心を持った時、すでに「すげかえられた首」の構想がある程度
 まとまっていたのではないかと考えることも出来る。誘惑の讃美
 誘惑の恐ろしさを示すという点ではゲーテの「パリア」より「す
 げかえられた首」の方が遙かに強烈であり大規模であるからであ
 る。しかしこの点はまた別途に論ぜられるべきものとおもう。

註

- (1) Thomas Mann : Der Erwählte, s. 8.
- (2) Thomas Mann : Erzählungen, s. 784.
- (3) Hans M. Wolff : Thomas Mann, Werke und Bekenntnis, s. 105.
- (4) Hans Eichner : Thomas Mann, Eine Einführung in sein Werk, s. 98.
- (5) Thomas Mann : Erzählungen, s. 787.
- (6) *ibid.*, s. 719 ff.
- (7) Hans M. Wolff : Thomas Mann, Werke und Bekenntnis, s. 104.

- (8) Bernhard Blume : Thomas Mann und Goethe, s. 44.
- (9) Thomas Mann : Erzählungen, s. 521, s. 492.
- (10) *ibid.*, s. 730.
- (11) Thomas Mann : Adel des Geistes, s. 248.
- (12) Thomas Mann : Erzählungen, s. 732.
- (13) *ibid.*, s. 739.
- (14) Karl Kerény : Die goldene Parodie, Die Neue Rundschau 67, s. 555.
- (15) Thomas Mann : Erzählungen, s. 793.
- (16) Bernhard Blume : Thomas Mann und Goethe, s. 60.
- (17) *ibid.*, s. 58.
- (18) Thomas Mann : Lotte in Weimar, s. 330.
- (19) Peter Szondi : Versuch über Thomas Mann, Die Neue Rundschau 67, s. 560.
- (20) Thomas Mann : Erzählungen, s. 793.
- (21) Goethe : Goethes Sämtliche Werke, Bd. II, s. 199 ff, Cotta Ausgabe (Des Paria Gebet, Legende, Dank des Peria)